

四天王寺流・建仁寺流建築の木割に関する比較研究

k99079 西田 陽子



1. はじめに

1-1 研究の目的

江戸幕府作事方創設以来、代々大棟梁職を継承した平内家・甲良家はそれぞれ四天王寺流・建仁寺流を称し、江戸建築界における2大流派を形成していた。本研究では、この2大流派について取り上げ、それぞれに関する木割書である『匠明』・『建仁寺派家伝書』を基にその設計について明らかにする。また『匠明』については3次元CADを用いて復元する。その上で、他の流派とどのような関係性があるかということを、江戸時代中期以降に地方で活躍した諏訪立川流や下山大工の建築形式の比較を行うことで明らかにすることを研究の目的とする。

1-2 研究の方法

- (1) 『匠明』・『建仁寺派家伝書』を解説することにより、構造・意匠形式を把握する。
- (2) (1)のうち『匠明』に基づき各部材の設計を行い、3次元CADで立ち上げる。
- (3) 前々年度の桑原麻樹子氏・東郷真木氏による「近世大工書『匠家雛形増補初伝』に関する研究」、前年度の松尾圭三氏による「近世木割書『宮坂文書』による諏訪立川流建築の復元研究」を参考に、諏訪立川流・下山大工の構造・意匠形式を把握し、『匠明』・『建仁寺派家伝書』との建築形式の比較を行う。

2. 2大流派とその木割書について

2-1 四天王寺流と建仁寺流について

四天王寺流は平内家の流れで和様をベースに、建仁寺流は甲良家の流れで禅宗様をベースにしている。建仁寺流系本は、江戸を中心にしたもの（江戸建仁寺流）と、加賀藩領を中心に伝存している（加賀建仁寺流）史料に大別される。この研究では、関東・甲信地方で強い影響を与えたとされる、江戸建仁寺流を取り上げる。

2-2 『匠明』について

『匠明』は江戸幕府大棟梁の平内家伝来の木割書で、慶長13年（1608年）に平内政信（1583～1645年）によって書かれた。完備した木割書としては、日本最古のものである。門記集・社記集・塔記集・堂記集・殿屋集の5巻から成り、枝割より算出される柱太さを設計の基準にし、建物別表記になっている。

2-3 『建仁寺派家伝書』について

江戸建仁寺流系本の堂宮雛形の筆写本は17世紀後半から19世紀にかけて16史料が存在する。その中でも最も内容豊富で整っている『建仁寺派家伝書』は18世紀初頭に体系化されたと考えられ本研究ではこれを使用する。これもまた、枝割により算出される柱太さを設計の基準にしているが、部材表記と建物別表記の併用になっている点が『匠明』と違っている。

3. 『匠明』・『建仁寺派家伝書』による神社建築の設計について

3-1 『匠明』による神社建築の設計について

『匠明』の社記集の中から特に三間社に関する部分を中心に解説をし、構造・意匠形式を把握する。

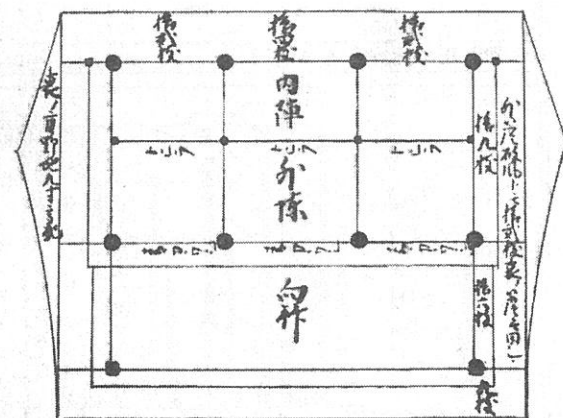


図1 三間社之図（平面図）

3-2 『建仁寺派家伝書』による神社建築の設計について

『建仁寺派家伝書』の神社の中から特に小三間社に関する部分を中心に解説し、構造・意匠形式を把握する。

3-1、3-2について表1・表2に示す。

表1 建物別構造形式

建物名	三間社	小三間社
構造形式	三間社流造 丸柱	三間社流造 丸柱
向拝	三間 角柱	三間 角柱

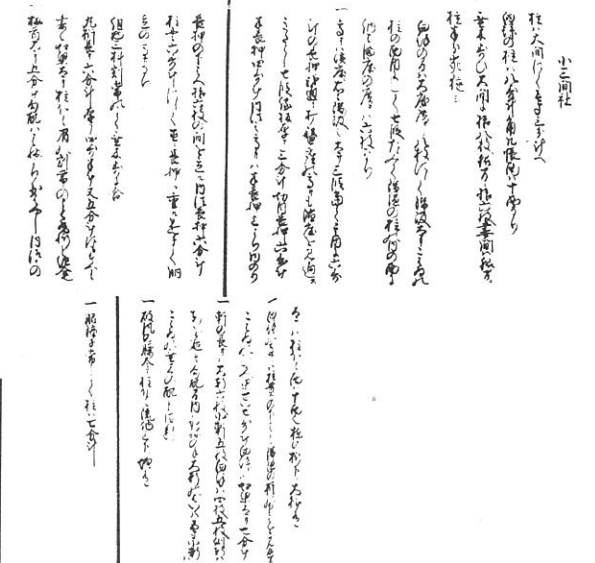


図2 『建仁寺派家伝書』—神社 小三間社

表2 『匠明』と『建仁寺派家伝書』における三間社流造の木割の比較

	『匠明』 社記集			『建仁寺派家伝書』 神社		
	木割	寸法 (枝)	備考	木割	寸法 (枝)	備考
柱太さ	a=0.1L	1.9	妻の間の10/100	b=0.13T	2.34	大間にて1寸3分斗
向拝柱太さ	0.7a	1.33	柱の7/10	0.8b	1.872	8分斗 角几帳面80面
表の間	—	14	14枝	T	18	18枝
脇の間	—	12	12枝	—	16	16枝
妻の間	L	19	7尺より小さい	16-1/2b	14.83	脇の間に柱半分狭し
大床広さ	—	5.5245	垂木6本と木間5つ	—	8	8枝
階段成	0.5a	0.95	柱の5/10	—	向拝の面内にして7段畳みて階隠の柱の内面に納める	
階段幅	0.6a	1.14	柱の6/10	—		
内法高さ	0.6L	11.4	妻の間の60/100	—	16	半長押上より内法長押の下端へ16枝の間を立つ
内法長押高さ	0.6a	1.14	柱の6/10	0.6b	1.404	6分斗
柱貫の成	0.7a	1.33	柱の7/10	0.6b	1.404	6分斗にして直に長押に重なる
丸桁長さ	0.6a	1.14	柱の6/10	0.6b	1.404	6分斗
丸桁厚さ	—	1	垂木1本と木間1つ	0.45b, 0.5b	1.053, 1.17	4分半斗または5分斗
扱首束の太さ	0.9a	1.71	柱の9/10	b	2.34	柱ほど
側軒	—	12	破風とも12枝	—	—	軒を回す
脇障子	—	0.8512	大床束柱の8/10	—	襖から上は6分斗、下は7分斗	
大斗幅	a	1.9	柱と同じ	b	2.34	柱の太さ程
大斗繰	0.24a	0.456	五間割	0.22b / 0.24b	0.515	五間割
大斗成	0.6a	1.14	幅の3/5	0.55b / 0.6b	1.287	幅にて五分半斗 又は高さ6分斗
大斗斗尻	0.6a	1.14	成と同じ	0.6b	1.404	6分斗
肘木厚さ (幅)	1/3a	0.63	柱の1/3	1/3 b	0.78	大斗の3分の1
肘木成	0.4a	0.76	幅の1.2倍	1/3 b × 1.2	0.936	下端に2分増し
巻斗長さ	b	1.475	垂木2本と木間1つ	c	1.468	垂木2つと木間1つ
巻斗斗尻	0.6b	0.885	長さの3/5	3/5 c	0.881	長さの3/5
巻斗繰	0.16a	0.304	成の2/5	0.24c	0.352	成の2/5
巻斗成	0.4a	0.76	肘木成と同じ	0.6c	0.881	幅にて6分斗
地垂木厚さ	0.25a	0.475	柱の1/4	0.2b	0.468	2分斗
地垂木成	0.3a	0.57	幅の1.2倍	0.24b	0.562	下端に2分増し
地垂木勾配	—	—	4寸勾配	—	—	5寸勾配

3-3 神社建築の調査

なお、以上の神社建築の分析を行うに先立ち、神社建築の見学および実測調査を行って参考とした。その内容は、表3に記す。

表3 実測調査および見学内容		
実測および見学の対象	構造形式	向拝
山梨県山梨市歌田金桜神社 実測（寛政2年、1790年）	1間社破風付入母屋造	1間
山梨県山梨市大井俣水ノ宮神社 実測（江戸初期）	2間社流造	2間
山梨県山梨市七日子神社 実測（1915年）	1間社流造	1間
山梨県山梨市万力金桜神社 実測（一）	1間社流造	1間
山梨県山梨市白山建岡神社 実測（延宝5年、1677年）	1間社流造	1間
山梨県山梨市水上神社 実測（安政6年、1859年）	1間社流造	1間
京都府宇治市宇治上神社 見学（平安時代後期）	正面5間側面3間流造（内殿3社）	無し
京都府宇治市春日神社	1間社流造	1間
京都府宇治市宇治神社 見学（鎌倉時代後期）	3間社流造	3間

表3のうち歌田金桜神社、大井俣水ノ宮神社、七日子神社、万力金桜神社、白山建岡神社、水上神社については実測調査を行った。このうち、水上神社本殿の平面図・断面図を図3に示す。

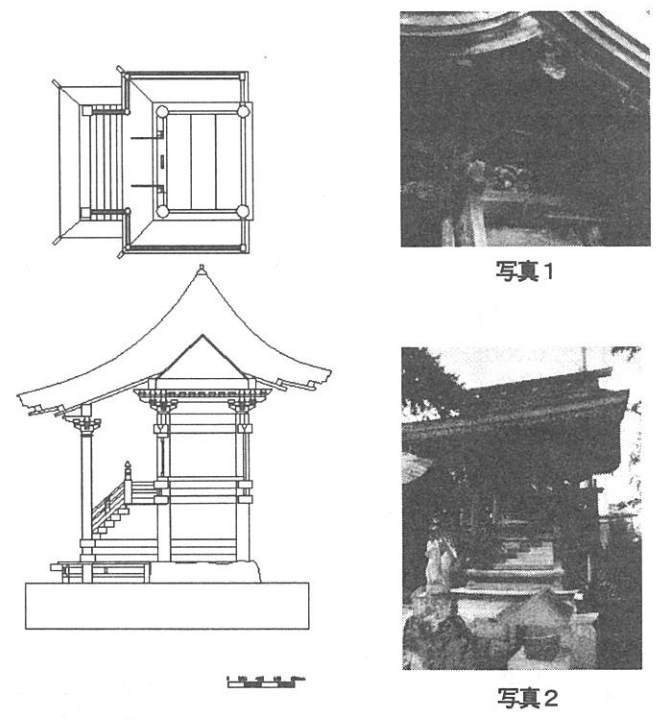


図3 水上神社本殿 平面図・断面図

3-4 『匠明』の木割に基づく三間社流造の復元

設計した各部材を組み上げ、建物全体をCADによって3次元に復元する。

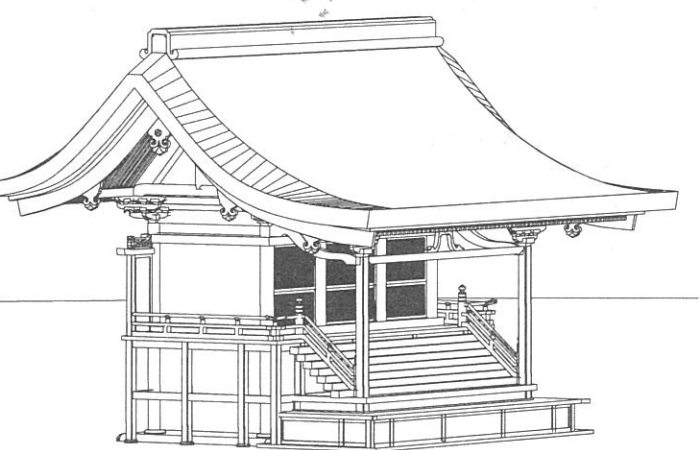


図4 復元した三間社流造の線画

4. 諏訪立川流・下山大工の各木割の比較

4-1 諏訪立川流と宮坂文書について

諏訪立川流は、信濃国の桶職人の次男和四郎（1744～1807年）が江戸で大工修行を行った後、信州地方で名を馳せるようになり生まれた。東は千葉神社から西は京都御所御門の彫刻までに建築彫刻を広めた建築流派である。宮坂文書は、宮坂家に所蔵されていたもののうち、約1400点の木割書、彫刻の下絵図、写生、模写などの古文書類で、諏訪立川流の建築形式を理解する上で重要な木割書を含んでいる。

4-2 下山大工と『匠家雛形増補初心傳』について

下山大工は、戦国末期に武田家の武将、穴山梅雪が下山に城を造り、その城下を本拠地としている大工集団で、近世の社寺建築の工匠として活躍していた。『匠家雛形増補初心傳』は、石川七郎右衛門重甫によって書かれたもので、下山大工による構造・意匠形式の基本を説明した書である。

以上の諏訪立川流・下山大工の構造・意匠形式を把握し、設計内容の解釈を基にしてそれぞれの枝数を計算したものをまとめて表4に示す。『匠家雛形増補初心傳』については、多くが実寸法で記されていたので、大斗幅の垂木2本と木間3つというのに従い、各部材の枝数を求めた。

表4 宮坂文書と『匠家雛形増補初心傳』における木割の比較

	諏訪立川流 宮坂文書『書式手控』ほか (三間社流造)			下山大工 『匠家雛形増補初心傳』 (三間社抜揚流造)		
	木割	寸法 (枝)	備考	木割	寸法 (枝)	備考
表の間	—	16	地割図より	—	18	—
脇の間	—	10	地割図より	—	16	—
妻の間	—	20	地割図より	—	36	—
柱太さ	a	1.6	妻の間20枝の8/100	—	2.5	大きさ7.0寸丸
向拝柱太さ	0.6a	0.96	柱の6分	—	2	大きさ5.6寸角
階段成	0.5a	0.8	柱の5分	—	1.75	大きさ4.9寸
階段幅	0.6a	0.96	柱の6分	—	1.75	幅4.9寸
地長押成	0.8a	1.28	柱の8分	—	1.143	大きさ3.2寸
柱貫成	0.8a	1.28	柱の8分	—	1.75	大きさ4.9寸
柱貫幅	1/3a	0.533	柱3つ割1つ	—	1	幅2.8寸
桁成	0.8a	1.28	柱の8分	—	2	大きさ5.6寸
桁下端	0.6a	0.96	柱の6分	—	1.321	幅3.7寸
大斗幅	a	1.6	柱程	—	2.5	大きさ7.0寸 (垂木2本と木間3つ)
大斗	—	—	5間割	—	—	5間割
肘木幅	b	0.873	垂木割之法より	—	0.821	幅2.3寸
肘木成	1.2b	1.047	下端の2分増し	—	0.964	大きさ2.7寸
巻斗幅 (平)	c	1.455	垂木2つと木間1つ	—	1.5	大きさ4.2寸
巻斗木口幅	—	1.296	(平側の幅) - (成の1/5)	—	1.321	大きさ3.7寸
巻斗成	3/5.5c	0.793	斗幅の3/5.5	—	0.929	セイ2.6寸
方斗幅	c	1.455	垂木2つと木間1つ	—	1.5	大きさ4.2寸
地垂木下端	d	0.455	1枝/2.2	—	0.5	幅1.4寸
地垂木成	e	0.545	—	—	0.5	大きさ1.4寸
地垂木勾配	—	—	4寸2分勾配	—	—	5寸2分勾配
木負下端	2d	0.909	垂木下端×2	—	1	幅2.8寸
木負成	d+e	1	垂木成+垂木下端	—	1	大きさ2.8寸
茅負下端	2d	0.909	垂木下端×2	—	1	幅2.8寸
茅負成	d+e	1	垂木成+垂木下端	—	1	大きさ2.8寸

5. まとめ

『匠明』・『建仁寺派家伝書』について比べてみると、項目名・建築形式の一致する部分が多くある中、『建仁寺派家伝書』の方が木割が太く、勾配が急であることが分かった。この2つが江戸建築界の2大流派ということ踏まえると、諏訪立川流の宮坂文書『書式手控』は『匠明』に、下山大工の『匠家雛形増補初心傳』は『建仁寺派家伝書』に似かよっているものだと考えられる。後者においては、表記方法においても部材別表記と建物別表記の併用であるところも似ている。

記述方法については、『匠明』・『建仁寺派家伝書』・宮坂文書『書式手控』の3つの木割書は枝数表記のみの記述が見られるのに対し、『匠家雛形増補初心傳』では枝数

表記と実数表記の混在がみられた。

最後に、それぞれの年代を踏まえて考えると、四天王寺流・江戸建仁寺流の木割書は、著されてから年月の経った江戸時代後期に地方に広がったと考えられる。

<参考文献>
伊藤要太郎・太田博太郎 『匠明』 鹿島出版会 1989年
伊藤要太郎 『匠明五巻考』 鹿島出版会 1989年
近世建築書一堂宮雛形2建仁寺流 大竜堂書店 1988年
桑原麻樹子・東郷真木 「近世大工書『匠家雛形増補初心傳』に関する研究」
芝浦工業大学2000年度卒業論文
松尾圭三 「近世木割書『宮坂文書』による諏訪立川流建築の復元研究」 芝浦工業大学2001年度卒業論文

指導教員名 伊藤洋子 教授